

中国の医療事情

(2009年3月)

column2

北陸大学薬学部臨床化学教室教授
三浦 雅一

私が社会科授業で学んだ、かつての中国は、国家が医療費を負担し、医療サービスは無料だったような記憶があります。しかし、過去の中国医療制度では、13億人の需要を満たすには遠く及ばず、想像しがたいことに古い社会（共産）主義スタイルの「揺りかごから墓場まで」の医療制度をすべて捨て、2001年より個人負担による新医療保険制度（日本で言えば生命保険、疾病保障保険または損保保険に該当）に変換しました（正確には2001年より北京、上海などの大都市からスタートしたらしい）。すなわち、自分の健康は自分自身が守りなさいということです。もっと悪く言えば、今の米国も同様、貧困者は医者にはかかれぬということでしょう。日本のように国民誰もが受診できる保険医療制度は、中国ではもう存在していません。むしろ日本の医療制度が社会主義であり、中国の医療制度が資本主義と言えるかもしれません。

その結果、中国では、お金を稼ぐことが多くの病院と製薬会社の目標となっています。このため中国の病院では欧米の最新医療機器（検査機器）が導入されており、マーケット的にも日本ほどではありませんが注目されています。もちろん、「医は仁術」なんていうカッコイイことは山本周五郎の小説「赤ひげ診療譚」の世界で、現代日本でも当てはまらず「医は算術またはビジネス」の方が該当することも事実ですが、このため医師の診療を受け、病院に入院することが、特に都市貧困層にとっては患者家族の家計破綻につながる大きな要因ともなっています。一方、地方の住民にとっては医療過疎地域が多く、保険制度の整備も遅れているため、医療費が患者に重くのしかかるようになって来ています。

一般の人々が病院に行くのは、いよいよ症状が悪化してから、地方の病院等ではとても手に負えず、都市の大型病院で診てもらうしか手がないのが現実のようです。しかも医療費が、患者家族にとって「破産する」するほど高額となるケースも頻繁に起きています。また、このような医療制度改革によって、病院は独立採算となり、優れた医師や医療設備を導入し、大勢の患者を集めることのできる病院だけが生き残れるようになってきていることも事実です。しかし、「かかりつけ医院またはクリニック」ならぬ「かかりつけ薬局」のような「医院」（中国では医療相談も含めて代替医療行為があるような施設も「医院」と呼ぶらしい）と称されることもあり、こちらにまだいける人はよいのが実情のようです。

このような医療制度のもとで昨年1月に中国の保健大臣は、世界最大の人口を持つ国家の全ての国民に基本的な医療を提供するためのプログラム（健康中国2020計画）を発表しました。このプログラムは、国民に公共医療サービスを提供し公的サービスへの平等なアクセスを促進するというもので、現在の73才の平均寿命の改善も目標としています。

医業に関わる者の一人として、隣国で繰り広げられるこうした大掛かりな医療改革について今後も注意深く見守りたいと思っています。